【昭和11年創刊】昭和20年11月13日第3種郵便物認可 ©毎日新聞社2021（日刊）

2021（令和3年）1/22 金曜日

毎日小学生新聞

MAINICHI
発行所 毎日新聞東京本社
〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

配達お問い合わせ 購読お申し込み
0120-468-012
（6－21時、一部地域は平日10-18時）
定価 1か月1750円（本体1620円、消費税130円）・1部70円

毎日小学生新聞編集部
郵　便 〒100-8051（住所不要）
ファクス 03-3212-2591 電話03-3212-0321
メール maishou@mainichi.co.jp

「目の見えない人の目になってほしい」

ルイ・ブライユさん

石川倉次さん

日本唯一の点字新聞編集長、記者にインタビュー

大阪にある日本で唯一の点字新聞社、点字毎日『とZOOMをつないで、点字や点字新聞のつくられ方などを学ぶイベントが一月二十二日に開催されました。六人の小中学生が参加し、点字毎日編集長の遠藤哲也さんや記者の佐木理人さんからお話を聞きました。

皆さんは点字毎日を知っていますか？点字毎日は目の不自由な方々に情報を届けるための新聞で、週に一度、日曜日に発行されています。新聞社ではたらいている人は20人ほど。一九三三年に創刊号を発行してから一度も休刊せず読者のもとへ届けています。

持てば一人で取材に行けるそうです。あのヘレン・ケラーもここを訪れた取材をしたら、目が見えるスタッフがパソコンで文字を書き、点字変換ソフトを使って点字にかえます。次に全七日の各ページの組みあわせで文字を表す点字を使って点字毎日を印刷します。

そうです。点字新聞は、六つの点が触読という実際に点字をさわり、まちがえがないか確認します。その後デスクの組みあわせで文字を表す点字を使って点字毎日を印刷します。

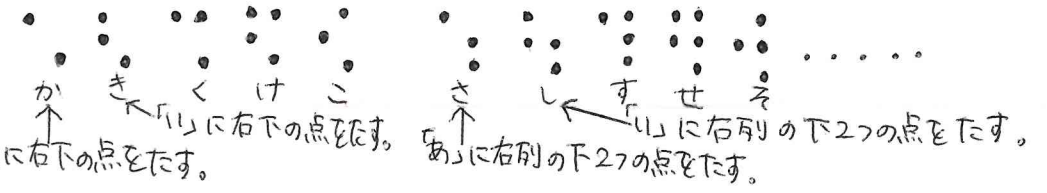
用いています。点字はフランスのルイ・ブライユが考えました。それを日本語にしたのが石川倉次さんです。というベテラン記者が確認します。最後に編集長が最終確認をし、印刷します。

点字には漢字などがないので同じ音で意味が違う言葉、例えば「雲」と「蜘蛛」などの区別が難しいです。そして一部ずつホチキスでとめ、点字がつぶれないよう手でやさしくおります。こうして点字新聞は読者に届けられています。

「雲」のときは空の「雲」、「蜘蛛」の時は「虫」などをつけてわかりやすくしているそうです。また、写真を入れることができないので読者が想像できるように色や大きさなどの描写を入れるようにしているそうです。

全七日の記者佐木さんは、「点字は自分の生活にはあまりなじみがないかもしれませんが、今日の新聞をきっかけに点字に興味を持ってみたり、身の回りの点字に目を向けてみてはどうでしょうか。」と話していました。点字は私たちの見えない人の目になってほしいという思いで作られた。ぜひそんな点字を大切に思ってくれるようにしてほしい。

【加藤 あかね】



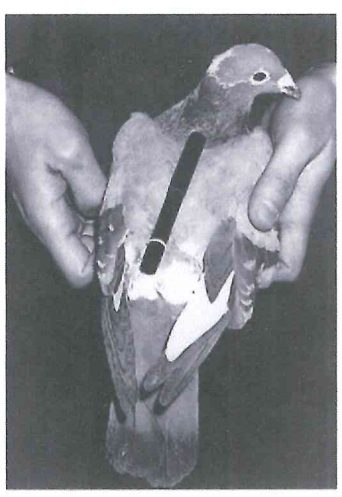
伝書鳩の思い なるほドリへ

毎日新聞東京本社は、緑豊かな皇居のほとりにある。本社が入るパレスサイドビル（東京都千代田区一ツ橋）の屋上には、6羽のハトの像が置かれている。ビルの設計者からの依頼で制作されたというが、なぜハトの像なのか。

今のように交通や通信が発達していなかった100年ほど前、「伝書鳩」は新聞社にとって重要な通信方法だった。「伝書鳩」はハトの帰巣本能を活用。東京の各新聞社では100羽以上のハトを屋上で飼っていた。取材現場から原稿を送るときは、ハトを数羽つれていったという。記者は通信用のうすい紙に記事を書き、長さ4㌢ほどの筒に入れてハトの足につけて放った。写真フィルムは長さ10㌢ほどの筒に入れ背中にゴムバンドで背負わせた。ハトが新聞社にもどるとハト係が記事や写真を担当に渡した。ハトたちは原稿やフィルムを何百キロも運んだ。

ハトには成績表がつけられ、成績が優秀なハトほど出動回数が多かった。成績が悪かったハトは、運動会を盛り上げるためにくす玉から飛び出す役をつとめたという。

毎日新聞では、東京オリンピックの次の年（1965年）まで大活躍した。「なるほドリ」の尊敬するトリは伝書鳩。ハトたちのがんばりは今も受け継がれている。


背中に写真フィルムをいれる筒を背負った伝書鳩。原稿は脚の筒に入れた。新聞社に戻る時、タカに襲われる危険があり、複数の伝書鳩が同じ原稿メモを運んだ